

温暖地における 養畜農家の夏作飼料作物栽培 (完)

——主として乳牛・豚の飼養における飼料生産を検討する——

水 島 隆

2 青刈飼料の栽培とそ

の利用

(6) 青刈大豆

青刈大豆は酸性土壌にも比較的強く、高温多湿な気候を好む作物である。温暖地にあつては青刈トウモロコシと共に昔から栽培されている飼肥料作物である。この草本の特長は、栽培が極めて容易であり、発芽生育共に速く、四月上旬に播種したものにあつては、六〇〜七〇日の生育期間で二、〇〇〇〜二、三〇〇キロをあげることが出来る。家畜の嗜好もよく飼料価値が高い

上に収量も多いところから暖地の養畜農家に酪農家に多く栽培されている。(写真1 参照)

大豆の品種であるが、北は北海道から南は九州まで広く栽培されいわゆる地方種も含めておびただしい品種がある。従来、青刈大豆と呼ばれて家畜の青刈飼料として栽培されている品種は、大体において秋大豆型またはこれに近い型の品種で、高温に加えて長日条件で栄養生長せしめられたために茎は莢化し(写真2参照)、収量も多いが、必ずしも常にこの型の品種が多収であるとは限らない。特に早春でし

る。

筆者の地区で現在栽培されている品種には、茶千石・操大豆等が多く、雪印種苗株式会社で育種した雪印一号・雪印一〇号等も収量が多く、広く栽培されるようになった。

栽培法としては、専用栽培の他に普通作の間作として栽培する方法(写真3・4参

照)や、秋冬作青刈飼料の間作に栽培する方法(写真5参照)がある。
専用栽培には、写真14の様に畦幅七〇〜七五センチの条播で単播するものもあれば、青刈トウモロコシ、スターングラス、ソルゴー等の混播あるいは、交互畦播などが実施されており、むしろ筆者の地区にあつては混播が交互畦作に変わっている。
利用法としては、生草飼料として給与する場合、なるべくいね科その他の生草と混合して与えるよう工夫すべきである。また、乾燥したものは穀類や、又カ類以上の粗蛋白質を含むから、一時に多量に給与させることなく、乾燥貯蔵して利用することのほか、エンシレージとして用いてもよい。

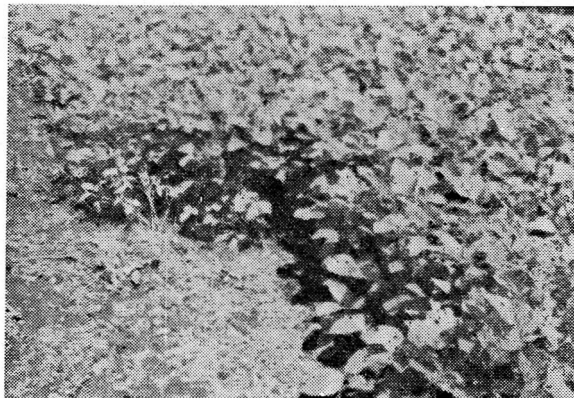
(7) カウピー

暖地で、盛夏から秋にかけて、耐暑力を著しく発揮する一年性の豆科作物である。



(写真2) 青刈大豆の莢化状況

かも栽培期間の短い場合の青刈は、むしろ夏大豆型で収実用として栽培されている品種の中に成績のよいのが見出されている。元来、青刈大豆と実取大豆との間に明瞭な差異はないから、品種の選択は播種時期と栽培期間を十分考慮して行うことが大切であ



(写真1) 養畜農家に栽培されている青刈大豆の生育相



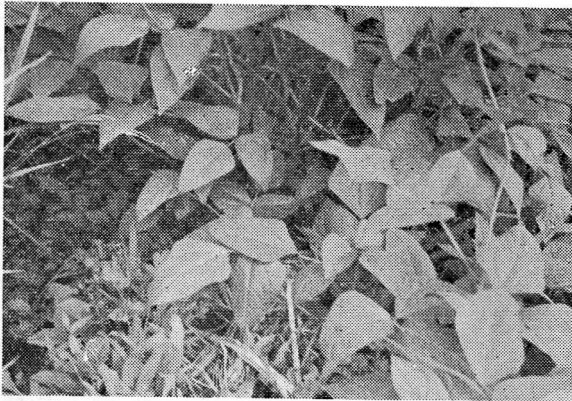
(写真3) 小麦の間作に播種された青刈大豆の発芽状況



(写真 5) イタリアンライグラスの間作に栽培された青刈大豆の生育相



(写真 4) 稈麦の間作に栽培されている青刈大豆の生育状況



(写真 7) カウピーの蔓性と再生力を示したのもの



(写真 6) 青刈トウモロコシとカウピーの交互栽培の一例

また、写真6にみられるようなカウピー一三畦に青刈トウモロコシ二畦の交互互栽培も酪農家に多く栽培されるようになった。これは、青刈トウモロコシが一回刈であるのに対し、カウピーは二〜三回刈り取り給与出来ることから、この栽培法が採り入れられたもので、青刈飼料の給与上誠に都合がよい。写真7は一回刈りしたあとの再生力と蔓性を示したもので、収量においての差異は余り認められない。写真8は、普及所主催で、農業技術員協議会の現地検討会を実施した折、カウピーの栽培を研修したので青刈トウモロコシとの混播生育を写したものであるが、ただこの草種で栽培する場合目的をサイロ詰用にすれば最も効果が大きく、青刈用であれば写真6に示す様式(裁

一名青刈ササゲといい、ダイズについて重要な夏のマメ科作物である。この草本は、大体、暖地向きで気候風土に対する好みはトウモロコシに似ており、栽培期間、飼料価値はダイズに類似している。ダイズの茎葉はヒメコガネによつて甚大な被害を受けるが、カウピーは殆ど食害されないからこの虫の発生地帯では非常に喜ばれる草本である。

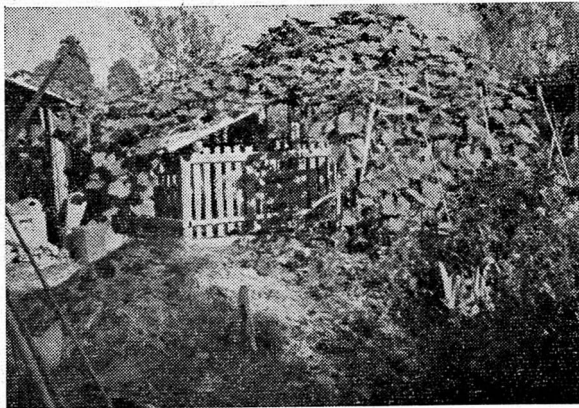
栽培の要領については、大体青刈ダイズに準じてよく、混播栽培においても、播種量等は青刈大豆に同じでよい。この点について特に筆者が試験した稲早期あとの青刈トウモロコシとの混作栽培では一〇坪当り一二、〇〇〇キログラムの多収をあげ、サイレーシ用に最も好ましい組合せであることを考察した(牧草と園芸第八巻、第九号、養畜農家の夏作飼料作物栽培二参照)。



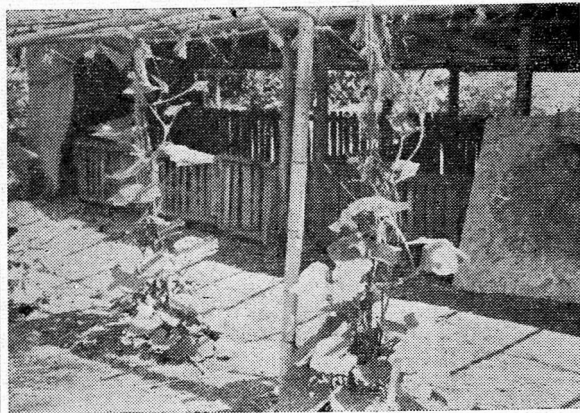
(写真13) 普通畑に栽培されたラージボンキンの着果状況



(写真 8) 青刈トウモロコシとカウピーの混播生育相(初期)



(写真12) 右のポンキンがこんなに繁茂している



(写真11) 豚舎の陽覆いに栽培されたポンキン

夏から秋にかけての多収な多汁飼料として栽培容易な作物である。家畜とくに、乳牛・豚の飼料として好適である。

食用カボチャと同属であると云われるが、果実は極めて巨大となり、収量多く、貯蔵力には乏しいが、蛋白・脂肪・ビタミンに富む栄養価の高い飼料作物である。

(8) 家畜カボチャ

(ポンキン)

この栽培で留意することは、播種量を普通の倍量位にせば生草量を確保できる。



(写真14) マンモスポンキンの型を示す



(写真10) 田圃の畦に播かれたカウピーの繁茂状況



(写真9) スーダングラスとカウピーの混播生育状況

以上、四回にわたって温暖地における養畜農家の夏作飼料作物栽培と題して、筆者の担当する熊本県の一辺境の実績を中心に記述したのであるが、読者諸兄におかれては、その栽培実績において秀れた成績をあげておられるものと信じて疑わない。

はじめの項に述べたように、自給飼料あつての家畜飼養であり、それが経済的にプラスするものでなければ栽培目的がない。家畜は愛撫すればする程愛情が湧くものである。この愛撫する気持を、生活源であるエサの研究に注ごうと考える者である。

(熊本県菊池東部農業改良普及所技師)

栽培は普通われわれが栽培する食用カボチャと同様極めて容易であり、何処にでも空地利用として栽培されるが、筆者の地区に主にみられる方法は、写真11・12の如く豚舎の陽覆いに利用されているのが極めて多い。勿論、専用栽培も行われているが、それは養豚専業に近い農家の場合であり、他は、新墾畑であつたり、畦畔地帯のいくらか広い所などに栽培されている。

写真13は普通畑に栽培されたラーシポンキンの着果状況を写したもので、追肥を何回も行えばびつくりする様に大きいものがつく。また写真14は、マンモスポンキンで果実の形がそれぞれ異つている。筆者の地区には二つの酪農組合、二つの養豚組合が現在実動しており、飼料作物の種子購入はなるべく雪印種苗株式会社優良種子をお願いしている。このポンキンも、最初は雪印にお願いして栽培しその後は、大体自家採種でまにあわせているようである。